

## 眠りのテクニク

東長良中学校 2年 杉山 凜

今現在、五時間目。そして国語の授業中。

このたった二つの条件が揃うだけで、とあるスポーツが強制的にスタートする。その名も「居眠り」である。ネーミングセンスについては言及しないで頂きたい。だってこのスポーツを適確に表現できる言葉、使わないなんて勿体無い。

居眠り、という言葉からただ寝るだけと思われるかもしれないが、正式な競技としては様々な加点ポイントが存在する。いかにバレずに眠るかや、眠りのフォームの美しさ、眠れた時間などがあげられる。正式に配点が決まっているものもあるが(授業参観で眠れたら二十点追加、フォームを問わず教科書で隠れたら加点は三点など)、状況に応じて加点が異なるため、いくつかの戦術が必要である。

まずは国語を担当する教師だ。この競技のディフェンスである。マンガでは視力の悪いオジーチャン先生が担当することが多く、かなりバレにくく容易にディフェンスをかくぐれるのだが、現実はそのとはいかない。「遅刻遅刻〜」と言いながらトースト啜って学校へ走る女子高生が存在しないのと同じ理論である。ちなみに俺のクラスは、教師歴三年目の女性教師。若くて視力が良く、机間巡視が多いディフェンス型だと大体の居眠りはすぐにバレる。一番厄介なのは、バレた後の説教だ。「授業が基本なんだから…」と延々と語り始め面倒臭い。最悪の場合、職員室へ連行され、命からがら帰ってきた選手も頻発している。職員室はいくらなんでも古いぞ、居眠る側としても令和っぽい説教を考えて欲しいものだ。しかし手強いディフェンスの監視を掻い潜って眠ることができれば、大幅に加点されるので、それなりの覚悟を持って挑む必要がある。そういえば説教中にも居眠りをした選手に、勇気を讃えて三十点の加点があつた…という居眠り界の伝説があるが、真偽は定かでない。

次は急な指名への対処である。前の人から順番に当たっていくスタイルならば机を前にずらしておく。すると前の生徒が立ち上がる時に椅子が自分の机にぶつかり、目覚ましとして機能する。俺はこの方法で十分、点を獲得出来る。だが、最前列だったり、「今日は十三日だから十三番!と見せかけて、三十一番」と、陽気なタイプは、列なんぞガン無視する厄介なディフェンスだ。そんな場合、恥なんぞ捨てて真面目に授業を受けているクラスメイトに頼つた方がいい。個人競技でも連携プレイは大事だ。

そして最後に、眠りのフォームが、プレイヤー達を一番悩ませる。誰もが知るぶつぶし型は、大概すぐに注意されるか、隣の席の誰かに起こされてしまい、減点対象となる。バレなくとも、シンプルすぎて加点は期待できない。ペンを置き、腕組みをして何かを考えているように見せるタイプもあるが、ジャークキング(居眠り中にガクツとくるアレである、こちら減点対象への対処が必要になるし、第一バレたら、ペンすら持たないやる気のない生徒、

というレッテルを貼られてしまう。バレなかったらかなり加点されるが、リスクが高いのでベテラン選手以外は使わないことが多い。昭和は、まぶたに目を描いて周りの爆笑をさらっていったようだが、今は令和だ。シールドに決めたい。

対処すべきシチュエーションや作戦はまだまだあるが、今回のパターンをいろいろ考慮すると、ペンを持ったままパッと見勉強しているように見え、バレても「頑張ってたけど寝ちゃいました〜テヘツ」ぐらいで終わるものが安全かつ高得点を狙える、というわけだ。つまり……どのフォームで戦いながら寝てやろうかと結論を出そうとした時、静かにチャイムがなった。

「あ、時間なんで授業終わりまーす、ハイきりーっ。」

しまった。一番避けるべきパターン「作戦考えてたら授業終わった」というのをやってしまった。この場合、眠れなかった、という一番のテクニク不足によって大幅に減点され、眠気というペナルティ付きで敗北となる。

「六時間目は絶対に寝てやる。あの心地よい快楽を絶対に味わってやる。」

次の試合の作戦や！次のディフェンス相手は…予定黒板に目をやった。

「体育 バスケットボール」